

学習支援を広め高めるラーニングコモンズ： グローバル学習環境という挑戦

米澤 誠

はじめに

大学図書館を中心としてラーニングコモンズが普及してきている現在、そこでの学習支援のあり方について種々議論がなされるようになってきている。しかしながら、図書館が行ってきた情報探索講習やライティング指導といった従来型の学習支援策だけでは、アクティブラーニング促進というラーニングコモンズ本来

の目的達成は困難であるというのが実情であろう。

そこで本稿では、利用する大学生の多様な学びの観点から、ラーニングコモンズでの学びを再定義するとともに、グローバル学習を中心とした学習支援の新たな展開について考察することとした。

1. 大学生の学びの諸相

1.1 大学生の4類型

大学生への学習支援を考える前に、まず現代の学生がおかれている大学教育との関係性を確認しておきたい。

金子元久によると、学生は次の4つに類型化される。¹⁾²⁾

①高同調型

このタイプの学生は自分について自信をもち、しかも将来への展望が明確。そして大学教育側の意図と学生の将来展望が一致。自分の目指すべき職業が明確で、その職業への準備を目的とした教育（医学・薬学・歯学など）を受入れている。

②受容型

自己認識や将来への展望は必ずしも明らかではない。とりあえず大学教育に期待し、その要求に進んで従おうとする。

③独立型（限定同調型）

学生の自己・社会認識の確立度は高いが、そこから生じる「かまえ」と大学教育の意図が必ずしも一致していない。将来、企業への就職を目指している学生は、大学の専門的科目の学習は適度にし、サークルやボランティア、アルバイトに時間を使う。

④疎外型

自己・社会認識が未確立で、しかも大学教育の意図との適合度も低い。したがって授業にも興味もてない。

この4類型を図示すると、次のようになる。（図1）

すなわち、①高同調型と②受容型は大学教育を受容しているの、授業に出席し、図書館にもよく来る傾向にある。一方、③独立型と④疎外型は授業科目の学習はほどほどにしており、図書館に来る機会も少なくなる。そして、大学教育を受容している学生は「大学教育の射程内」にあり、受容していない学生は「大学教育の射程外」にあるといえる。

このような中、大学教育と図書館の存在意義を高めるためには、射程外にいる学生をどれだけ取り込んでいけるかが焦点となる。すなわち、「現代の大学教育が変革を迫られているのは、一方で知識社会化・グローバル化の中で、大学教育の中核にあった高同調型の学

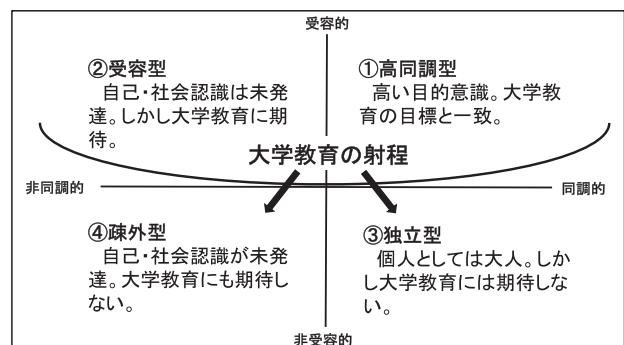


図1 大学生の4類型と大学教育の射程

生に対してさらに高質の教育を与えることが必要であるとともに、これまで教育システムのいわば『遊び』の部分として容認されてきた限定同調型〔独立型〕の学生を、明確に大学教育の射程に入れることが要求されるようになってきているからである³⁾といわれている。

大学教育は、「一方で、その射程をソフトさせて、これまで射程に入っていなかった学生をその射程に入れること、そしてその射程に入った学生に、より強いインパクトを与えること、この二重の課題が求められている⁴⁾」のであるが、実は大学図書館もそのような課題を持っていると筆者は考えている。

1.2 多様な学びの認識

一方、そのような学生たちは、授業という正課以外でどのような学びの活動を行っているのだろうか。

学生たちは正課では、教養教育・専門教育・語学教育などの科目を履修している。ライティング教育や情報探索教育については、正課の場合もあれば、図書館などが行う課外講習会などで受けることがある。さらに就職のためには、大学のキャリア支援もとの公務員等の試験勉強や就職活動が重要な学びとなっている。また、サークルやボランティア、アルバイトなどの課外活動からも学ぶところが非常に多い。⁵⁾ これら大学教育の全体像を図示すると、図2のようになる。

大学教育を狭い意味でとらえると正課科目の範囲内となるが、本来の大学教育は図2に示した全体であり、この広い意味での大学教育が学生を育てて、社会に送り出している。サークル活動支援やキャリア支援は、大学の重要な教育活動なのである。そしてこの広義の教育こそ、上記4類型の③独立型の学生を大学教育の射程に入れる活動となるのである。まさに「学生の教育や教育支援を考える時、学生の勉学面だけでなく、

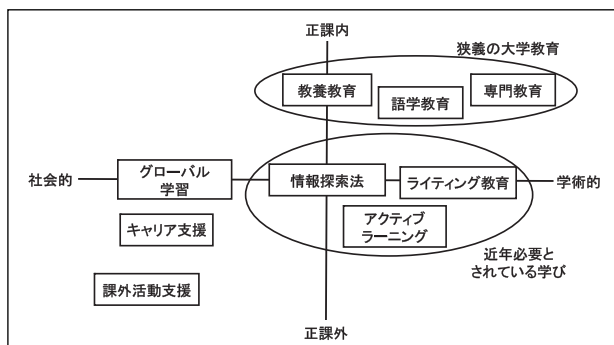


図2 大学教育の全体像

学生の生活をトータルに考える必要がある⁶⁾」のである。

なぜなら、「大学時代は、授業や勉学を通して知識が広がり深まるだけでなく、部・サークル、友人関係、アルバイトなどを通じたさまざまな出会いや体験を通して、考え方や価値観も大きく変容する時期といえる。

(中略)部活動・サークル活動は、学生に楽しみを与えるだけでなく、社会の一員としての自覚を促す効果をもっている⁷⁾」からなのである。

一方これまでの大学図書館は、狭義の大学教育の範囲内では、学習支援の役割を考えてこなかったといえよう。これからの大学図書館は、多様な学びを包含する広い意味での大学教育を想定して、どのようなサービスができるのか考える必要があろう。

1.3 学習支援を広めるラーニングコモンズ

2012年、東北大学の図書館メインフロアにラーニングコモンズを開設した当初は、特に広い意味での大学教育を意識していた訳ではなかったが、学生たちが自主的なイベント活動の場として使いたいとの要望が出てきた時には迷わずに提供した。そして、利用規約と申込み手続きを整備して、学生たちのアクティブラーニング的な活動が容易に行えるような運用を開始したのである。

学生たちの利用が先行したが、その後、大学内のキャリア支援センターのイベントでの活用機会も多くなり、相乗効果的に学生の利用も増えてきた。学生たちの企画によるキャリア支援のイベントも数多く開催されるようになり、まさに学生たちが自律的にアクティブラーニングを行う場となっている。(図3)



図3 学生によるキャリア支援イベント

また、ラーニングコモンズ内で、部活ミーティングをグループ毎に行う姿も増えてきて、重要な大会の試合対策ミーティングのためにエリア単位で使用するケースも出てきた。部活動・サークル活動も広義の学習と捉えれば、ラーニングコモンズを利活用するアクティブラーニングとして意義あるものと考えている。(図4)



図4 部活ミーティング

2. 学習支援を高めるグローバル学習

2.1 グローバル学習とは

ラーニングコモンズを実現したのちに、次の展開として考えたのはグローバル学習支援であった。すなわち、「①国内の学生が海外留学するために必要とする学習と、②海外からの留学生が国内で必要とする学習、③それらの学生たちと地域・社会が交流することで得られる学習」をターゲットとしたのである。⁸⁾

それは、グローバル学習がまさに前述の「大学教育の中核にあった高同調型の学生に対してさらに高質の教育を与えること」であると考えたからである。留学を志向する学生は、そもそも高同調型であり、「短期留学の経験がある学生は、自律的学習時間が長く、授業にも積極的に参加し、また大学教育の意味を肯定的に評価する割合が高い」⁹⁾といわれている。

そして留学体験は、自分を相対化するうえで異なる社会や文化に直接接することができ、大学で学んだ知識を見直す契機を作り、多様で変動が激しい現代社会のなかで自分を確立する役割を果たすこととなる。すなわち「留学経験は、自己アイデンティティを確立し、それと大学での学習との関係を意識し、さらに自己を維持しながら他者と共同する、という点で、自律的学

習の基礎となることが期待できる」¹⁰⁾のである。(図5)

2.2 ラーニングコモンズの新展開

言い方をかえると、グローバル学習はアクティブラーニングを超えた、さらにインパクトの強い高質の学習機会であり、その学習機会の場を図書館に作ることは、ラーニングコモンズの新展開と位置づけられるのである。そしてこの場では、学生の自律的で多様な学習を引き出すために、単なる語学学習だけではなく、日本文化を含めた多様な文化の学習、国際交流活動、学生による自主的なイベント・活動などが行われることが期待されるのである。

2014年、東北大学附属図書館2階に設置したグローバル学習室は、まさにそのような学びの活動を行う学習環境となっている。開設以来、東北大学グローバルラーニングセンター主催で、留学プログラム説明会やグローバルキャリアセミナー、短期留学プログラム研修会などが頻繁に開催されている。また、学生が主体となった留学生支援サークルや国際交流支援サークル、英語ゼミなどの活動が活発に行われている。(図6)

それらのイベントの他にも、このグローバル学習室では語学学習(留学生による各国語の勉強会「グローバルカフェ」)や留学生・東北大学生同士のチューター活動が日常的に行われており、学生にとって最も身近なグローバル学習の場として機能している。外国人と気軽に交流し、異なる思考と接することができる図書館は、まさに主体的学習を促進する環境となっている。¹¹⁾グローバル学習環境という私たちの新たな挑戦は、順調にその成果を上げているのである。(図7)

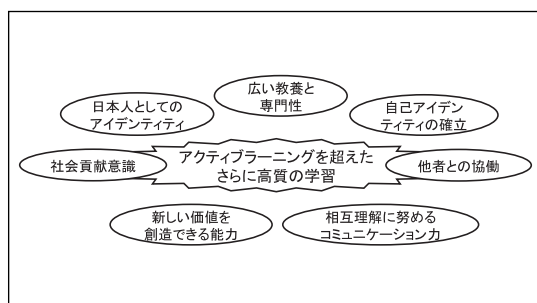


図5 グローバル学習の効用



図6 短期留学報告会



図7 グローバルカフェ

2.3 サードプレイスとしての図書館カフェ

さらに、2015年に図書館内に新たに設置したカフェも留学生の人气が高く、留学生と東北大学生の集いの場となっている。

サードプレイスとは、社会学者レイ・オルデンバーグが提唱した概念であり、第一の家庭、第二の職場に次ぐ第三の場であり、そこは広く社会的でコミュニティの基盤を提供するものである。「サードプレイスというのは、家庭と仕事の領域を超えた個々人の、定期的で自発的でインフォーマルな、お楽しみの集いのための場を提供する、さまざまな公共の場所の総称」¹²⁾なのである。この引用文中の「仕事」の部分に「教室での授業」と置き換えてみると、図書館カフェも第三の場所になりうると考えている。

オルデンバーグのいうサードプレイスの特徴は、次のようであるといわれる。

- ①中立の領域（誰もが自由に出入りできる）である
- ②地位や身分から人を平等にする
- ③会話がおもな活動である
- ④利用しやすく便宜である
- ⑤常連がいる
- ⑥目立たない存在（地味）である
- ⑦その雰囲気遊び心がある
- ⑧もう一つのわが家のように居心地がよい

サードプレイスという考え方は、スターバックスを成功に導いたCOEのハワード・シュルツが提唱していることでも知られている。¹³⁾しかし、スターバックスはサードプレイスという概念をブランドイメージに利用しているだけであり、他者との会話による交流がほとんどないその店舗は、真のサードプレイスではないという指摘もある。¹⁴⁾

東北大学の図書館カフェに集う留学生と学生たちを観察していると、大学という特定のコミュニティの中に存在するカフェであることから、顔見知り同士の交流の場として機能している。その点で、街中にあるカフェとは異なり、まさに「インフォーマルな公共生活の中核的環境」であるサードプレイスとして、一定の役割を果たしつつあると感じている。テーブルの半数近くを留学生が占めるときもたびたびあり、ここもまたグローバル学習の場として機能していると実感している。(図8、図9)



図8 図書館カフェ



図9 留学生メイドカフェイベント

そもそもカフェは、読書や単独学習の場であり（従来の図書館機能）、協同学習と知的交流の場でもあった（ラーニングコモンズ機能）。さらには憩いの場であるという意味で図書館カフェは、従来の図書館とラーニングコモンズの機能を拡張するものであり、また人々が集う図書館の一つの中心になると考えている。¹⁵⁾ (図10)

学生が主体的に学ぶ場としてのラーニングコモンズを実現し、図書館カフェという魅力的な構成要素を取込んだこの図書館は、いまや東北大学というアカデミックコミュニティの核として育ち始めているのである。¹⁶⁾

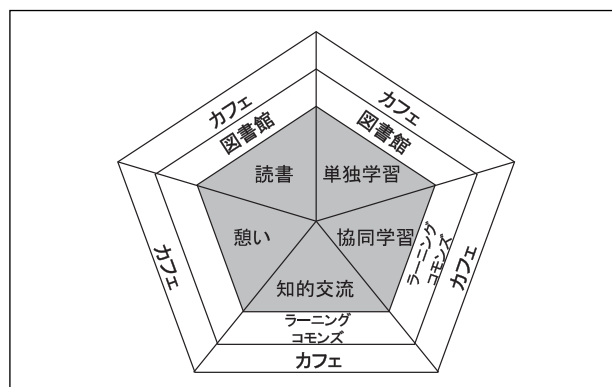


図10 図書館カフェの機能

参考・引用文献

- 1) 金子元久, 主体的な学びへの転換を図るために, VIEW21, 2012年, pp.4-9
 - 2) 金子元久, 『大学の教育力』(ちくま新書 679), 筑摩書房, 2007年
 - 3) 同上
 - 4) 同上
 - 5) 金子元久, 自律的学習への道, IDE:現代の高等教育, No.543, 2012年, pp.16-22
 - 6) 武内清, 大学とキャンパスライフ, 『大学とキャンパスライフ』第1章, 上智大学出版, 2005年, pp.7-35
 - 7) 同上
 - 8) 米澤誠, ラーニング・コモンズの大きい可能性, IDE:現代の高等教育, No.556, 2013年, pp.23-27
 - 9) 金子元久, 留学の新段階, IDE:現代の高等教育, No.558, 2014年, pp.4-11
 - 10) 同上
 - 11) 安西祐一郎, 主体的に学ぶ:21世紀日本を支える教育の理念と実践, IDE:現代の高等教育, 2012年, pp.5-10
 - 12) レイ・オルデンバーグ, 『サードプレイス:コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』, みすず書房, 2013年(原著初版1989年)
 - 13) ハワード・シュルツ, ドリー・ジョーンズ・ヤング, 『スターバックス成功物語』, 日経BP社, 1998年
 - 14) ブライアン・サイモン, 『お望みなのは, コーヒーですか?:スターバックスからアメリカを知る』, 岩波書店, 2013年
 - 15) 猪谷千香, 人が集まる「サードプレイス」図書館, 週刊ダイヤモンド, 2015/10/17, 2015年, pp.62-63
 - 16) 猪谷千香, 『つながる図書館:コミュニティの核をめざす試み』(ちくま新書 1051), 筑摩書房, 2014年
- なお、ラーニングコモンズをめぐる近年の議論については、以下の書籍が参考となる。
- ・溝上智恵子編著, 『世界のラーニング・コモンズ』, 樹村房, 2015年
- (よねざわ まこと, 附属図書館事務部長)